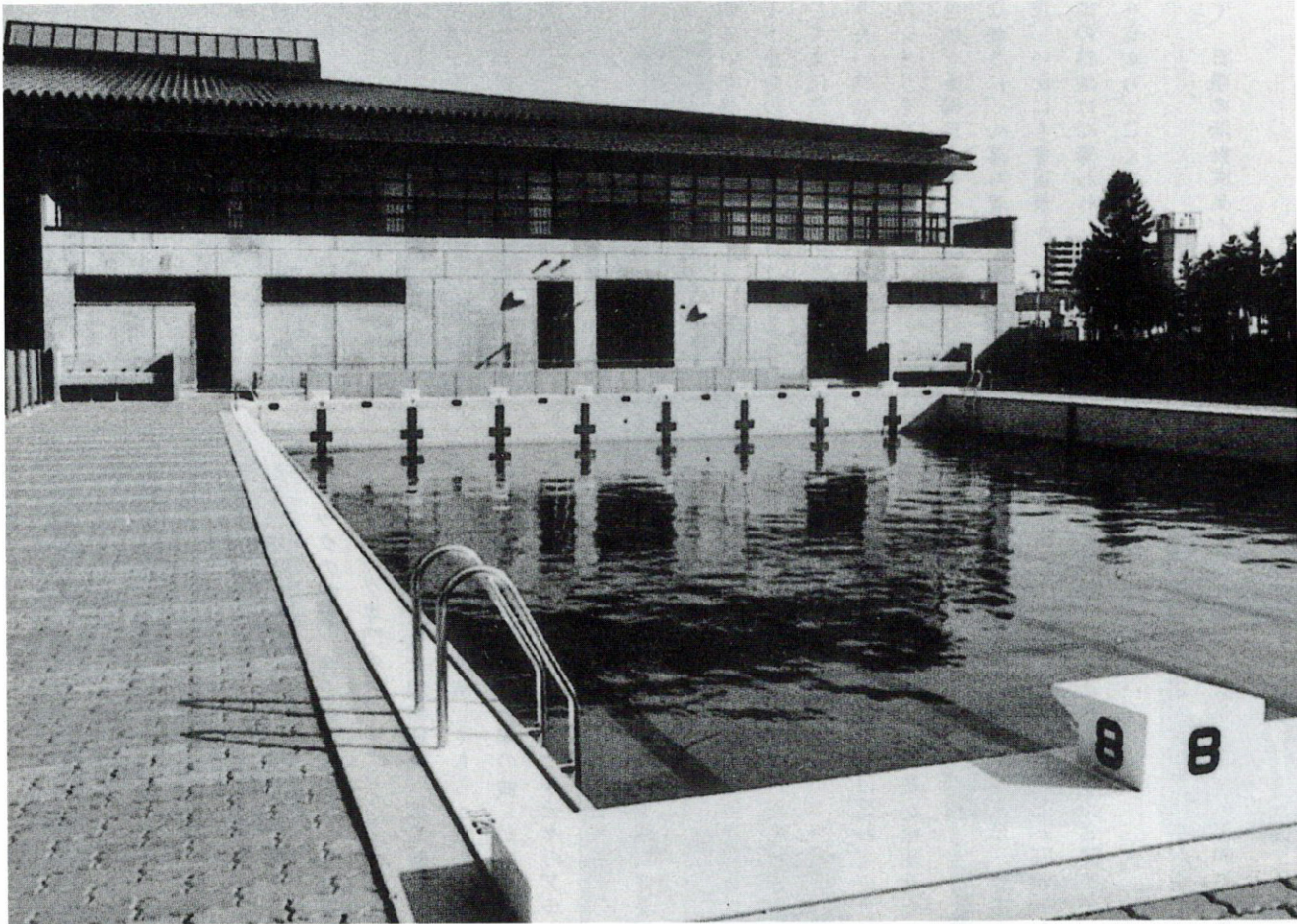


## 母校は新たな飛躍へ

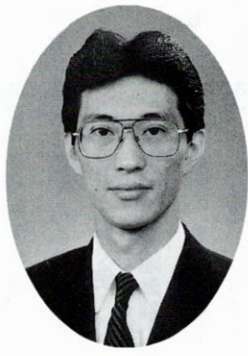
新校舎の完成が生徒の勉強面に好ましい影響をもたらしたのは言うまでもない。学習の成果をすべて大学進学に結びつけるのはいささか乱暴な気もするが、新校舎の完成直後に入学し、最初にこの校舎でまるまる三年間の高校生活を送った昭和五七年三月の卒業生は、現役で一五名の国公立大学合格者を出している。(ちなみにその後の国公立大学合格者数は、微減のち頭打ち傾向となるが、これは、これぐらいの校



昭和63年完成の新プール



三田 義清  
第3代理事長



三田 義之  
第4代理事長

舎・設備は当たり前と思って入学してくる新しい世代の新生の気質や、すでに述べたような公立高校の相次ぐ新設の影響も考えられよう)

しかしいっぽうでは、この校舎が授業のための教室棟が主であったため、課外活動、特に運動部においてはいまだに十分な練習の場が得られていなかった。たとえば、室内競技であるバスケ、トボール部、バレーボール部は講堂を交代で使用していたし、卓球部、体操部は雨天体操場を共用、剣道部も民間道場を主な練習場としていた。屋外競技のクラブ活動も、陸上部、ラグビー部、ハンドボール部が校庭を共用、野球部も校外グラウンドを部費で借りていた。このように、屋内競技、屋外競技とも校地内の運動施設はつねに満杯状態で、体育の授業も天候によっては制約されることが多かった。雨が降って校庭が使用できないときは講堂を使わざるをえないのだが、同時に二つのクラスの授業は無理であった。

#### 学校に言いたいこと

私がこの学校に入って初めに感じたことは、設備が不十分だということでした。

学校の設備というものは、クラブや体育の授業などにも大きく影響するし、その他の生活にもいろいろな面で与える影響は大きいと思います。(中略)

一番最初に体育館がないこと。とてもひどいと思います。何よりも先に、これは、ぜひ建てほしいと思います。今のせまい講堂で室内でやるクラブがいくらか考ええると、やはりなくてはならない設備のひとつだと思います。クラブを思い切りできないということは、そのクラブの成績にも関係するだろうし、私立の学校なのでスポーツで名をうらなくてはいけないと思います。

授業の面でも、せまい講堂では横に置いている物にぶつかったりなど、事故も起こりやすいと思うので、ぜひ、何が何でもなくてはならない設備の一つだと思います。(後略)

『石桜』第七八号(昭和五八年三月発行)に掲載の高校一年生の作文は、全校生徒の気持ちを余すところなく代弁している。

これらの悩みを解消したのが、昭和六〇年年初頭の新グラウンドの誕生と体育館の完成であった。

広々とした体育館ができて、たしかに学校の様子は変わった。雨天体操場時代には休憩時間中あまり縁のなかつた生徒までが、昼休みの球技に加わるようになった。放課後はバスケットボール部やバレーボール部の部員たちが、仕切りのネットを境に同時に三面のコートを使い、練習に余念がなかつた。力一杯のシュートや思い切ったパスを放つときの生徒の目の輝きは、西日に映える真新しい床の輝き以上。高い天井

のもと、伸び伸びと練習する生徒を見守る教師たちの満足げな顔にも、宿願の体育館完成の喜びが表れていた。

それまで講堂を使用していたバスケット、バレーの両部が新しい体育館へ練習場を移し、これにともなう卓球部と柔道部が雨天体操場から講堂に練習場を移した。体操部も体育館に練習場所を確保した。その後、雨天体操場は取り壊され、グラウンドも広く使えるようになった。

こうして手狭だった各運動部の練習場が余裕をもったものになり、存分な練習が叶うようになると、各部とも目覚ましい成果をあげはじめた。体育館完成後の各運動部の主な成績を見てみると、柔道部は平成元年から七年まで高総体でつねに上位入賞者を出しているし、ハンドボール部は平成二年県新人大会三位、四年には高総体三位、六年に県新人大会ベスト8。バレーボール部は平成六年に高総体ベスト8。屋外競技でも、ラグビー部は平成六年にAブロック昇格。ソフトテニス部（旧軟式庭球部）、テニス部の国体出場も記憶に新しい。



第六代校長  
西在家 寛

また新プール完成以降の水泳部の主な成績は次のとおりである。昭和六三年高総体・県民体上位入賞。平成三年県新人大会一〇〇メートル平泳ぎ優勝。平成四年高総体一〇〇メートル平泳ぎ優勝。平成六年東北大会出場権獲得。

平成五年には滝沢村菓子に野球部の専用グラウンドが完成した。外野、ファールグラウンドとも公式球場にひけをとらない充分な広さ（敷地一万二〇〇〇坪、両翼九〇メートル）の堂々たるグラウンドである。部室、内野照明、外野フェンスなどの付属施設も次々と整ったこのグラウンドで汗を流す野球部の活躍が期待される。

ひるがえって、ここ数年の文化部の活動で特筆に値するのは何と言っても物理部の活躍である。超伝導やプラズマ、超音波の研究で全国に名を馳せ、平成八年三月にはアメリカのセントルイスで開かれた米政府主催の全米理科教師連盟（ナショナル・サイエンス・ティーチャーズ・アソシエーションNSTA）の催しに参加、日頃の研究をデモンストレーションというかたちで発表してきた。いまや岩高の名物クラ

ブに成長した感がある。

生徒会活動も、以前にもまして活発になってきている。運動部の（いやそうでなくても）生徒は腹が減る。弁当だけでは足りないから、休み時間に学校近くの店で買い食いをする。しかし、本校は街の真ん中で交通量の激しい大きな道路に面している。授業に戻ろうと急ぐ生徒が危なっかしくてしょうがない。生徒指導の教師が何度も注意するが、結局イタチごっこだった。この問題に生徒会が積極的に取り組み、購買部の設置、飲料の自動販売機の設置等の成果をあげた。生徒会執行部が中心となり、全校生徒に対するアンケート調査や、代議員会、生徒総会、学校長への陳情、業者との交渉など本当に頼もしい限りで、まさに「自治に集える我がが生命」の応援歌とおりの働きであった。

七〇周年の記念すべき年をステップに、輝ける創立一〇〇周年へ向かって、我がが母校はさらに高く飛翔していく。